

重要文化財(石造物)



▲石造栗島神社鳥居 (県重文)

安楽院の守護神栗島神社の石鳥居。高さ2.18m。柱のころびのない古式のもので、左の柱には康暦2年(1380)の銘がある。銘入りの古鳥居としては国内有数。南北朝時代。(大字甲山◎No.43)



▲廃光明寺宝篋印塔 (町重文)

花崗岩製で、全高2.44m。町内では最大。隅飾の突起の反りが少なく、伏鉢が大きく、格狭間の形式等から見て鎌倉～南北朝時代の造立。平成12年の修復の際、基壇内から同時代の須恵質の甕が出土した。(大字堀越◎No.119)



結界石 (県重文)

今高野山の寺域の四方に聖域を示すために建立されていた石柱で、現在3基が残る。高さ88.5cm、幅27.6cmあり、1基は上部を欠損している。これらの石柱には「大界外相北方」「大界外相西方 建武五年(1338)戊寅九月八日」などの銘がある。(大字甲山・龍華寺◎No.37)



廃万年寺僧侶墓碑 (県重文)

三川ダム建設時に廃万年寺墓地から移転した。室町時代の無縫塔、墓碑、宝篋印塔、一石五輪塔の計7基が指定となっており、6基に銘がある。(大字川尻・廃万年寺★No.26)



▲宝篋印塔 (町重文)

花崗岩製で、全高1.19m。塔身部の四方には胎藏界の四仏を表す種子が陰刻されている。町内にある宝篋印塔のうち胎藏界の種子のある完存のものはこの1基のみである。室町時代初期。(大字長田◎No.170)



▲経塚石塔 (町重文)

花崗岩製で、全高1.25m。五輪塔の水輪部が方形で内部を四角に繰り抜き籠部を造り、籠部の脇に享祿2年(1529)の銘がある。石塔の周囲は石組が築かれている。(大字津口◎No.133)



右造五輪塔群 (町重文)

鎌倉後期～室町の五輪塔が数十基集められ、地名その他から大田庄内で活躍した久代氏との関連がうかがえる。うち1基に「暦応二年二月五日ノ勝念阿弥陀仏」の銘がある。(大字東上原・久代谷業師堂◎No.25)

重要文化財(建造物)

今高野山総門 (県重文)

中世大田庄を支配した総政所「今高野山」の入口を固めた門で、四脚門、切妻造、棧瓦葺の建物で、2本の主円柱以外は室町末期再建時の様式を伝えている。門の左右には仁王像(町重文)を安置してあり、仁王門とも呼ばれている。(大字甲山・龍華寺◎No.44)



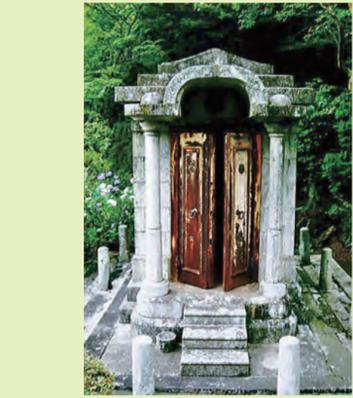
安楽院本堂 (上) 及び付山門 (下) (県重文)

今高野山の子院安楽院の本堂は、もともとは書院造りで地方豪族の居宅を寄進したものと考えられる。昭和29年に一部焼損したが修復され、昭和40年に現在地に移築された。室町時代の建築。山門は、四脚門で、柱の礎盤に石を使用せず、柱そのものを礎盤として使用した珍しい形。安土桃山～江戸初期の建築。(大字甲山・龍華寺◎No.41)



▲目鏡橋 (国登録)

明治41年(1908)に築造された石橋。橋長6.6m、幅員12.17m。整形した花崗岩の石材を布積みして造られている。石材の一部に、町内の石工名や受負人名が刻まれている。石積み方法から、ヨーロッパ系の技術の流れをくむことがわかっており、当時の地元石工の技術を知る貴重な遺産である。(大字小世良◎No.176)



▲普光寺観音堂 (旧大田尋常高等学校奉安殿)

昭和10年(1935)に旧大田尋常高等学校の奉安殿として建築された。GHQとの覚書によりほとんどの奉安殿が毀される中、戦没者追善供養のための観音堂として移築再利用することで残った。施工は、地元の石造彫刻の名工と有名だった小林確郎で、建物に至るアプローチ部分が一部カットされているほかは、建築当時のままの姿を残している。(大字井折◎No.180)

▲福生(荷)神社本殿 付棟札 (県重文)

典型的な芸備造り三間社。菊や牡丹の透かし彫りや竹に虎の浮彫を各所に施すなど装飾性の高い建築で、屋根が銅板葺になっているほかは江戸初期の建築様式をとめている。(大字上津田◎No.153)

重要文化財(美術品ほか)



▲三鉗・独鉗 (県重文)

三鉗(上)、独鉗(下)ともに金銅製の密教法具で装飾性も高い。鎌倉時代の作。(大字甲山・龍華寺★No.38,40)



▲太鼓 (県重文)

胴内には多くの墨書が見られ、文明18年(1486)や天正10年(1582)の年号が読める。胴張がなく、自然木をくり抜いたままの状態。両側の皮は細い皮ひもで引き締めただけである。内部には三方から鉄の輪つなぎがあり、音響効果を狙ったものと思われる。(大字東上原・大田庄歴史館保管◎No.76)



▲紙本墨書大般若経 (県重文)

この大般若経は永和4年(1378)の写本で、縦28cm、横11cmの折本形式の経が393巻伝わる。永和3年～5年にかけて備後国御調郡三原金剛寺のために、沼田庄内の各寺で分担書写されたもので、保存状態が比較的良好。文政14年(1831=天保2年)に修復がされている。(大字田打・永寿寺☆No.111)



▲絹本着色弘法大師像 (県重文)

龍華寺御影堂の本尊で、表装は屏風仕立て。椅子席に正座する大師の姿を描いた自画像と伝えられ、高野山及び善通寺の大師像とともに、町内を代表する著名な作品である。鎌倉時代初期の作。(大字甲山・龍華寺★No.36)



▲絹本着色釈迦十六善神像 (県重文)

龍華寺御影堂に伝来のもの。大般若経を護る護法善神を描いたもので、釈迦を中心に十六善神を配している。室町時代の作で、正徳3年(1713)と文政7年(1824)に修復されている。(大字甲山・龍華寺★No.45)



▲戸張 (県重文)

縦1.74m、横0.63mの布3枚を暖簾状につづったもので、蓮華牡丹の唐草模様を織った緞子地の戸張。戸張には墨書で、弥陀三尊の種子を中心に文字が記され、末尾に「永禄十年(1567)丁卯五月吉日吉光弥五郎壬寅歳敬白」と記されている。(大字東上原・上原八幡神社、複製品を大田庄歴史館展示◎No.75)



▲頼迫遺跡出土遺物 (町重文)

頼迫遺跡は縄文中期～晩期にかけての遺跡で、土器をはじめ石器や安山岩の剥片などが大量に採取された。町内における縄文時代の遺物として貴重なものである。(大字川尻出土・大田庄歴史館◎No.89)



▲宇山祭祀遺跡出土遺物 (町重文)

この遺跡は、峠の神を祭った跡とされ、古墳時代頃の手づくね、天日干しの土製模造品が大量に出土した。その種類は玉や動物形、舟形など多種にわたり、出土数の多さも含めて国内の祭祀遺跡の8遺跡に数えられている。(大字寺町出土・大田庄歴史館◎No.90)



▲丹下氏関係遺品 (町重文)

丹下氏は宇津戸を本拠地として室町後期頃から活躍した鋳物師で、芸備の寺院に梵鐘の名作を多く残している。遺品は中世～近世の古文書の他、梵鐘鑄造に関わる各種の鋳型等があり、近年現存の木製鋳型が照善寺や仏通寺の梵鐘の一部に使用されていたことが確認された。県内には梵鐘の鋳型遺品は少なく貴重な資料である。(大田庄歴史館◎No.77)

重要文化財(考古・歴史資料)

▼大久保遺跡出土弥生土器 (町重文)

昭和22年(1947年)に、東神崎長神社で土砂採取中に3点発見された。ほぼ完形を留め、細頸の球形胴部で、列点文が頸部から胴部にかけて施されている。「良式」との呼称で、弥生中期中頃の土器の基準とされている。(大字東神崎出土・大田庄歴史館☆No.81)



▲古瓦 (町重文)

県史跡康徳寺古墳の東側に確認された康徳寺廃寺(白鳳時代)の瓦。この時代に見られる雄渾な複弁蓮華文で、瓦頭の下部には「水切り」と呼ばれる突起がある。この廃寺は平成3年から4年間、発掘調査が実施され、古瓦等が大量に出土した。(大字寺町出土・教育委員会等☆No.104)



▲丸小山経塚出土品 (県重文)

丸小山(賀茂)の経塚から出土したもので、径5cm、高さ10cmの金銅製の経筒。経筒には天文4年(1535)の銘が刻まれており、廻国納経に由来したものと考えられ、経筒内には木製の十一面観音像が安置されており、当時の信仰を物語る貴重な遺品である。(大字賀茂出土・善法寺☆No.126)